

## 物語の作者

笹淵, 友一

<https://doi.org/10.15017/12292>

---

出版情報 : 語文研究. 16, pp.69-75, 1963-06-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 物語の作者

はしがき

九大に入學して最初に接した春日先生の御講義は平安朝文学史と狭衣物語の演習だったと覚えてゐる。その後も先生は源氏や竹取などの物語類を演習の材料にされた。先生の演習はハツタリなどの微塵もない、地味な、国語学的な解釈を主としたものであったが、その間に自然に文学のおもしろさを感じさせられた。わたしが卒業論文の対象に物語をえらんだのも先生の感化によるところが大きかった。そういう因縁があるので先生の追悼の意味をこめて物語に関する一文を草したい。

先生が学士院に入られてから御上京の機会が多かったので近年はお目にかかったり、随行したりする機会も比較的多く、幸福な弟子だったと思つてゐる。そういう憶い出を述べればいろいろあるが、他の機会に譲りたい。なお本稿は本誌十三号の拙稿「物語と小説についての覚え書」に繋がるものである。

物語の作者が近代の私小説家のように自分自身を主人公にするとはなかつたにしても、自分の体験を物語の構想の中に書き込もうという意識をもっていたかどうか、これは物語についてのわたしの疑問の一つである。

宇津保物語には学生や学生上りの宮廷人に関する構想がまじつてゐる。それが宇津保の特色の一つであり、また作者を文章生出身の源順に擬する根拠の一つになっていることは周知のことであるが、この場合順が作者であるにしても自分の体験を書き込もうという意識をもつていたとは必ずしも決められない。もちろんこれは作者の体験が無意識のうちにその想像として生かされるということを否定するわけではない。宇津保の作者が学問に関係のある者を多数登場させてゐるのはやはり彼の経歴を反映するものであったかも知れないところでのこの疑問に対する答えを作品そのものに期待することは恐らく不可能である。勢い当代の物語観の検討によつて何らかの理解を引き出す必要がある。

笹淵友一

蜻蛉日記の作者が西宮左大臣源高明の失脚と左遷について述べた条は極めて印象的であるが、その後の「身の上をのみする日記には、いるまじきことなれども、かなしとおもひいりしもたれならねば、しるしをくなり」という一句は、彼女の日記が自分に直接関係のない他人の身の上を書くものでなかったことを明らかにすると同時に——それにもかかわらずあえて書いたのは単なる事実の報道のためではなく、「かなしとおもひいり」った自分自身の情緒に対する執着のためであった。——物語が自分のことを書くものでなかったことを裏から示唆したものと解される。しかしこの理解をもっと積極的に示しているのは日記冒頭の文である。

世の中におほかたふるものがたりのはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上までかき日記してめづらしきさまにもありなん。

ここで日記と対立させられている物語は、この世ならぬ神仙譚や異類擬人の架空譚などの類ではあるまい。「かたちとても人にも似ず、こころたましひもあるにもあらで」「人にもあらぬ身の上」を書いた日記と対照させられていることから推して、その内容は当然「人にもあらぬ身の上」の人間と対照的な貴人、才子、佳人などの世にもめでたき身の上でなければならぬと思う。日記はそういう現実性に乏しいよい事づくめの空想、空言と対照的な「人にもあらぬ身の上」という現実、真の人生を書いたものだと作者は主張しているのである。ところでこの「そらごと」「まこと」は作者自身の体験の裏打があるかないかという問題をも含んでいるであらう。そういう意味で蜻蛉日記のいう物語のそらごととは作者の体験によって

実証されない空想性をも含むものと考えられる。

その人のうへとて、有りのまゝに言ひ出づることこそなければ、よきもあしきも、世にある人の有様の、見るにもあかず、聞くにもあまることを、後の世にもいひ伝へまほしきふしづゝを、心にこめがたくて、言ひおきはじめたるなり。

という源氏(螢巻)の物語論は蜻蛉日記の物語そらごと論の駁論ともなりうるものであるが、しかし物語が作者の人生体験そのものを書いたものでないという点ではむしろ一致している。物語は「世にふる人の有様の、見るにもあかず、聞くにもあまることを」言ひおき始めたものである。ただ「見るにもあかず、聞くにもあまる」ということは「世にふる人の有様」が作者の心に強い感動をひき起したことを意味している。しかもその有様は作者の見聞の対象であるから、作者自身でない第三者の有様でなければならぬ。更にその人のうへとて、有りのまゝに言ひ出でないというのは実名ではなく仮名を用いるということである。即ち仮名のもとに第三者の有様を書くのが物語だと源氏の作者は述べているのである。

## 二

物語は見るにもあかず聞くにもあまることを心にこめがたくて語られたものであるということは、作中人物が第三者であるにしてもその人物と事件とが作者に他人事と感ぜられない、いわゆる主体的な情緒を伴うことを示している。さきに述べたように蜻蛉日記が源高明の悲劇を身の上のことをのみ書きしるす日記に書き入れたのもそれが他人事といえない程作者の心を打ったからであった。そ

う意味で物語は第三者とその事件を書いたものであるにしても作者と没交渉とはいえない。ただそういう意味の交渉、主体性を近代小説の主体性と同一視することは可能であろうか。(もちろんいわゆる私小説と物語との異質性は明らかであるからこれは問題外のこととしておく。)

紫式部は左衛門督公任の「あなかしこ、このわたりにわかむらさきやさぶらふ」という声を聞いて、「源氏にかかるべき人見え給はぬに、かのうへはまいていかでもし給はむ」と思ったと述べている。フロベールは「ボブリー夫人は私自身だ」といったが、式部は「紫の上はわたしだ」とはいわなかった。もともと公任の「わかむらさきやさぶらふ」という言葉の中には理想化された紫の上という人物の空想性を揶揄した意味があつて、それに反撥する気持も式部にあつたかと思われる。しかしいづれにせよ式部が源氏、紫の上共に作者の内面の肖像という自覚をもたなかつたことは確かである。これは物語には近代文学の場合のような作者と人物(主人公)との関係がないこと、即ち作品における作者のアリバイを証明したものと云つてよい。

フロベールの「ボブリー夫人は私自身だ」という証言にもかかわらず、この作品はルーアン市から十八軒のリーという小さな町に起つた実際の事件に取材したものとされる。それは「臨床学的ともいえる微細厳密な事実の精査と配置と相俟つて、フロベールの客観的手法を確立した最初の小説であり、写実小説の典型と称されている。」(研究社「世界文学辞典」) それにもかかわらず「ボブリー夫人は私自身だ」と作者フロベールがいつたのは、この客観的な小説

の背後の作者自身が体験した人生葛藤が隠されているからであり、そういう意味で極めて主体的な作品だからであつた。だがこの主体性の裏側には「作品の中に自分の魂と心を、肉と血を、その全自我を注ぎ入れることを自ら禁じ、科学的、非個人的な態度に徹しようとした、きびしい自己棄却の態度なのである。この自己棄却と主体性との矛盾的自己同一性にこそ近代小説の典型的性格があると考えられる。これは近代小説の創作主体としての自我がきびしい実証的精神の鍛錬を経ていることを示す。

このような近代小説家の自我に対して物語作者の自我はどんな性格をもっているであろうか。物語は客観的であり、その主人公は決して作者の自画像ではない。だがこの客観性は決して実証的精神の試験をへて臆い取られたものではなくて、叙事詩以来の伝統として殆ど何らの葛藤をも経験することなく受け継がれたものである。それと同時に作者もまた自己棄却の苦痛を経験していない。彼にはそれ程主張すべき自我そのものが存在しないのである。物語の作者が自己を作者としてではなくて語り手として発想したことはこの自我の性格と関連する。物語の作者は心理的に自己の倫理を作品に持ち込むことを禁じられた、むしろ持ち込む必要がなかつた。更にいえば作中人物の倫理に対して責任を負う必要がなかつた。物語に対する作者や読者の意識が専ら芸術的観点に傾いているのはこのためである。

### 三

平安朝の日記随筆の物語論の関心についてみてその主題は作者

の倫理とは無関係であり、視覚性を重んずる人物描写と物語のプロットの問題に主として限られている。たとえば蜻蛉日記の物語とは「かたちとても人にもにず、こゝろたましひもあるにもあら」ぬ人の身の上を書いた日記とは対立する文芸様式であつて、「こゝろたましひ」と共に「かたち」のめだたき人の上を語るものであり、更にこの日記に昔物語のようだと書かれた事件は夫兼家がよその女に生ませた女子と十余年をへて筆者のもとで再会するという敷衍な邂逅談であつた。いうまでもなく構想のおもしろみが物語の重要な要素とされているのである。

源氏物語は物語の中でも特に豊かな内面的世界を含んでおり、したがつて純芸術的観点だけでは片づけられないと考えられるが、しかし紫式部の物語意識をより多く占めていたのはやはり芸術的問題だつたようである。紫式部日記に……

殿の三位の君、すだれのつまひきあげて給ふ。年のほどよりはいとおとなしく、心にくきさまして、「人はなほ心ばへこそかたきものなれ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、をさなしと人のあなづりきこゆるこそあしけれと、はづかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、「おほかる野べに」とうちずんじて立ち給ひにしきまこそ、物語にはめたるをとの心地し待りしか。と評された頼通の人間像は、その人柄、内面のゆかしさにもアクセントをおいてはいるが、その内面性も結局視覚的イメージを形成する要素としてその中に摂取されている。同じ日記に「物語の女の心地」がすると評された弁の宰相の昼寝姿は「萩、紫苑、いろいろの衣に、濃きがうちめ心となるを上にて、顔はひきいれて、覗の

管に枕してふし給へる額つき、いとらうたげになまめかし」いものであつた。この物語性は専ら視覚性に存している。以上の一、二の例だけで紫式部の物語意識の全部を決定するのは適当でないかも知れないが、源氏物語の理解にも役立つことは確かであろう。

紫式部よりも更に感覚、直観に偏つていた清少納言の物語観は、芸術的観点に偏つていた。枕草子の仲忠涼の優秀論は有名であるがここで問題になっているのは情趣美と構想のおもしろさである。構想のおもしろさの中にはあまりに非現実的な構想によつてリアリティを損い、情趣の調和を破壊することを好まないという意味をも含んでいる。これは専ら芸術的な興味である。更に斉信の

桜の直衣のいみじくはなばなと、裏のつやなど、えもいはずきよらなるに、葡萄染のいと濃き指貫、藤の折枝おどろおどろしく織りみだりて、くれなるの色、打ち目など、かがやくばかりぞ見ゆる。しろき、薄色など、下にあまたかきなり、せばき縁に、かたつかたは下ながら、すこし廉のもとちかうよりの給へるぞ、まことに絵にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそほとぞ見えたる。

という物語的人間像は紫式部日記の頼通像よりも更に絵画的、純絵画的である。

枕草子におけるこまの、物語や落窪物語の批評も場面描写のおもしろみが焦点になつている。もつとも伊勢物語の

また業平の中将のもとに、母の皇女の、「いよいよ見まく」とのたまへるいみじうあはれにをかし。ひき開けて見たりけんこそ思ひやらるれ。

という興味は純感覺的なものではなく抒情的要素をも含んでいるがしかしその抒情性も視覚的なものの中に融け込んでゐる。

更級日記の筆者の

われはこのごろわろきぞかし、盛りにならば、容貌もかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光るの源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにそあらめ……

という、少女時代の物語の読みかたが容姿に主眼をおいていたことはいうまでもない。

以上は一にぎりの例に過ぎないが、それでも平安時代の物語が常に主として芸術的観点から問題にされたことを証明しているといつてよからう。これはもちろん物語が倫理性、思想性を含んでいないという意味ではない。ただ読者も、そして作者も特別な倫理的問題意識をもつて物語に対してはいないのである。倫理性、思想性を含みながらしかもそういう問題意識をよび起さないのはなぜか。恐らく物語の作者が平安貴族社会という一つの精神共同体の内部に生活し、これに対して格別の問題意識をもたなかつたからであろう。もっとも物語の作者が貴族社会の中にあつて何の懷疑も不安ももたなかつたといえようことになる。紫式部は土御門殿の「老もしぞきぬべき心地する」めでたさの中にあつて、これに調和しえない心の悩みを感じていた。しかしそれはもちろん貴族社会そのものを疑つてかかるような不安ではなく、むしろ彼女は不安を打消して周囲と調和しようとして欲している。だから自分の悩みや不安という、個人的な問題を一般の客観的な問題として提示しようとする意識はもたなかつた。もっとも物語作者の中には源順のような貴族社会のアウトサイ

ダーでもないではない。(彼が宇津保などの作者であると仮定して)「物語はぬ花鳥に物を言はせ、心なき草木を、心ありがほに言ひなしてだに、常ならぬ世をなぐさめむと思ふ心もあれ」(源順百首の序)という彼の言葉は不遇の憂悶を物語の創作によつてなぐさめたものと解してよからう。ただアウトサイダーではあつたが、彼は貴族社会に対して独自の批判をもつていたわけではない。むしろインサイダーたることを彼は願つたし、それにもかかわらず願いが叶えられない故の憂悶であつた。だから精神的には彼もまた共同体のインサイダーであつた。そういう彼が独自の、個人的な倫理を物語に提示しようとしなかつたことはむしろ当然であらう。

遠藤周作氏はフランスのシャルトルの大教会の色硝子、焼絵硝子に印されている各種の職業組合の名前——いうまでもなくこれらの組合が建築に奉仕したしるしである。——について、

精神共同体を組織している各組合ユルゴットは職業こそ異なれ、その信仰、その精神形態とでは一致していた。彼等がそれに芸術的表現を与えようとする時、同じ信仰をもつた工匠がその為<sup>ため</sup>に働いた。したがつて工匠たちは自分の作品に個人意識を力調する必要もみとめなかつたのだ。真の製作者は彼自身の背後にある精神共同体だからである。彼等が作品に署名しなかつた秘密はそこにある。この秘密は文学をふくめてキリスト教芸術の完全なあり方をはつきりしめしている。中世のスコラ哲学者は芸術について積極的な発言をしなかつたがそれでも彼等の考えは一致している。それは一言でいえば行為の二つの形態「創るフレイム」ということと「為すアジェイル」ということとを混同しなかつた点だ。「為す」という行為はモラルのみ

にむすばれ、一方「創る」という行為は美と芸術とだけに従う。この二つはハッキリ区別されていたのである。

(「キリスト教作家としての立場から」現代キリスト教講座 第六卷)

と述べている。氏によればこの「為す」と「創る」とが混淆したのは近代になってからで、「ルネッサンス以後の個人主張と文学的には浪漫主義の個性意識との結果である。」この認識は物語とその作者の関係についても一つの示唆を与えるであろう。もともと遠藤氏のいう中世芸術はキリスト教芸術であり、物語は世俗の文学であるから、その立場を完全に同一視することはできないが、共通する点も少なくないと思う。物語が貴族社会の文学として共通の權威と価値との認識の上に立っていることは明らかであり、その作者が多く不明であることも偶然ではあるまい。作品が不明なのはいうまでもなく作者が署名をしなかったからであるが、署名をしなかったのは自ら作者たることを主張しなかったからであり、また作品を通じて自己の倫理を主張しようとしなかったからではないか。

紫式部は物語作者としての自分が人々から特別視されたことを述べている。重要なものはこの特別視の理由であるが、簡単にいえばそれは彼女の方のためであつて倫理のためではなかった。即ち「いと艶にはづかしく、人に見えにくげに、そはそはしきままして、物語好み、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに、見おとさむもの」という世人の想像は、文学的才能を特んで高慢な人づきの悪い女だろうというのである。一条院の「この人は日本紀をこそ読み給ふべけれ」という言葉もその学才を認めてのことであり、道

長の「すきもの」という批評は文才に対するものと思われる。これは田山花袋の「蒲団」が芸術としてではなく、専らその倫理によって世間を驚かしたのと好対照である。

物語は源氏のような芸術的にすぐれた作品でも通俗的という印象を与える。その原因は恐らくその倫理が常識的だからであろう。物語は時代の常識のわくの中で、それを肯定して書かれている。だから倫理の点で、即ち人間の生き方の上で、個性的なもの、何か異常なもの、予想を超えたものに出あうという期待をもつことはできない。(堤中納言物語の蝸めづる姫君などは貴族社会の常識を破った新しい価値観をもち出したように見えないでもないが、これは古典的なものの裏返しとしての戯画であつて、作者の真面目な主張だとは思えない。藤原の君の三人の変物と同様の扱いである。)これは明治の文学でも、自然主義以前の風俗小説に見られる傾向である。だが近代小説はこの常識に抵抗して、作家の主体に即した新しい倫理を提出する。さきの「蒲団」にしてもその芸術的価値はともかく、作者が旧い常識と自己の倫理との対決を企てていることは確かであり、そこにこの作の近代的意義はある。だが物語にはこのような意欲は認められない。伊勢物語などは多少時代の常識に対して新しい倫理を提示しようとする意欲を見せているが、それも必ずしも個人的なものとは言いがたい。そして時代を下るにつれてますますこの傾向は乏しくなる。源氏のすぐれた描写も常識の世界における描写の精緻に外ならない。それはたとえば幸田露伴の「五重塔」の描写のうまさと同通のものであり、近代小説の個性的描写と区別すべきものと思う。

むすび

物語はいうまでもなく敘事詩的な英雄説話の流れを汲むものであるが、この敘事詩的性格をあまり強調することは行き過ぎであつて作者の主体性をも認めなければならぬと思う。ただその主体性というものは、主として客観的素材に対する親和感、感情移入という抒情的、非倫理的要素にあつて、物語のモチーフとして作者の自我意識までも認めることもまた行き過ぎの感を免れないように思う。物語の作者も個人的な苦悩や不満などの問題をもつていた。ただそういう問題を作品のモチーフとしようとしたか否かが物語認識の一つの分岐点になるが、この点において物語と近代小説との間の距離を見失わないことが物語の歴史性を確保するためには必要であらう。

註

- (1) 御前に人々いとおほく、上人などさぶらひて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ定め、いひぞしる。涼・仲忠などがと御前にも、おとりまさりたるほど仰せられける。「まづ、これはいかに。とくことわれ。仲忠が童生ひのあやしきを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、「なにかは。琴なども、天人の下るばかり弾き出で、いとわるき人なり。帝の御むすめやは得たる」といへば、……
- (2) こま野の物語は、なにばかりのをかしきこともなく、ことばもふるめき、見どころ多からぬも、月に昔を思ひ出でて、むしばみたる蝙蝠とり出でて、「もとみしこまに」といひてたづねたるがあらはれるなり。

交野の少将もどきたる落窪の少将などはをかし。昨夜、一昨日の夜もありしかばこそ、それをもかしけれ。足洗ひたるぞにくき。きたなかりけん。

(3) 昔の若人はさるすける物思ひをなむしける。今の翁まさにしなむやは。

△学会彙報▽

総会 昭和38年5月19日

一、研究発表

松平文庫本千載佳句について

道行における近松の手法

名所の句と芭蕉

国語意識より見たる真名本伊勢物語

宝曆明和期の蝶夢

上代二音節語の音韻対応

ナルの特殊用法

「文法上許容二関スル事項」の検討

二、総会

三、人形浄瑠璃「文楽座」鑑賞

卒業生会員23名の出席がありました。

年始例会 昭和38年1月3日

在福会員で催している恒例の親睦会も年々盛況となり、今年は先生方に加えて35名の参加がありました。

九大善本展 筑紫万葉遺跡写真展 昭和38年5月11～13日

在学生の企画開催による九大祭参加の展覧でしたが、先輩諸氏の御来場も多く好評でした。

金原 理  
橘 英哲  
白石 梯三  
田中 智明  
佐田 道雄  
森山 隆  
春日 和男